

## WIN-Japan 活動報告 鹿児島県で初の女性交流会を開催

WIN-Japan 会員

前田 由起子(まえだ・ゆきこ)

樋口 奈津子(ひぐち・なつこ)

小林 容子(こばやし・ようこ)



### 原子力や放射線の理解をめざして

WIN(Women In Nuclear)とは、原子力・放射線利用の仕事に携わる女性の国際的なネットワーク。女性と次世代層を主な対象として原子力理解活動を行うことを目的としている。世界組織である「WIN-Global」は70カ国・約2,800名で組織され、その日本組織「WIN-Japan」は、正会員・賛助会員を含めて約200名が加盟している。メンバーは電力会社をはじめ、メーカー・研究所・大学などさまざまな団体および個人から構成されている。主な活動としては、女性交流会やシンポジウムの開催、新聞・広報誌・情報誌への情報提供、講演会開催活動などがあり、国内外問わず各地で活動している。

九州電力が川内原子力発電所3号機増設申入れを実施した薩摩川内市において2009年9月12日、WIN-Japan女性交流会「楽しく話そう、エネルギーや原子力のこと」を開催した。女性交流会は、原子力関連施設の立地地域に住む女性達とWIN-Japan会員が対話することにより、原子力の正しい情報を一般の方に伝えたり、日頃の疑問に回答することを目的としている。今回、薩摩川内市を中心とする88名の一般の方と、北は奥州・仙台、南は鹿児島の薩摩川内から集まったWIN-Japan会員23名が交流した。本会は第1部で講演会、昼食をはさみ第2部で交流会を実施した。

### 舞の海さんの巧みな話術にわいた講演と充実した意見交換が図られた交流会

講演会では、スポーツキャスターの舞の海秀平さんを講師に招き「スポーツもエネルギーも一日にしてならず」と題してご講演いただいた。頭にシリコンを入

れてまで相撲界に入ったことから、現役時代に技能賞を受賞するまでのエピソードや、現在の相撲界の状況についての巧みな話術に会場は大いにわいた。

相撲は自分のように小さい力士でも技を駆使して、自分より大きな力士を倒すことができる。同じように、資源の少ない日本は、原子力のような技術を駆使してエネルギーを確保することが大切、と述べられた。

第2部の交流会では、1テーブルに参加者7-8名とWIN-Japan会員2名の構成で12テーブルに分かれて、参加者からの原子力に対する不安や疑問点について話し合った。友人同士一緒のお申込みであっても、新しい出会いから人の輪が広がるように、見知らぬ人同士が着座するレイアウトにしたため、参加者は、最初は仲間と離れる淋しさからか不安が拭えないような表情であった。しかし、時間が経つにつれ会話も弾み、笑顔と会話で会場は和やかな雰囲気包まれた。

まず、自己紹介と交流会への参加動機を伺った。参加動機はおおよそ次のとおりであった。(1)原子力発電は元々危険なものだと思うので不安である。どうやって安全を確保しているのかを知りたい、(2)川内原子力3号機増設の必要性がわからないので教えてもらいたい、(3)地元説明会では男の人が大半で細かい話を聞きづらい雰囲気だったので女性交流会に参加したいというものであった。



講師は舞の海さん

参加者の多くは薩摩川内市内に住んでおり、原子力発電所は身近な存在であるので、さまざまな質問をいただいた。例えば、(1)事故が起きた場合、どこに避難し、どのような対処をすればいいのか、(2)北朝鮮がミサイルを発射したらどうなるのか、(3)地震が起きたら火災が起きるのではないのか、(4)なぜ川内原子力3号機を増設するのか、これにより危険も増すのではないのか—といった内容であった。また、「防災訓練に毎年参加しているが、形骸化しており実際事故が起きたときには役立たないのではないのか」という厳しい指摘もあったが、原子力発電所の近くに住む方の本音を聞くことができ、双方にとって充実した意見交換ができたと思う。

一方、原子燃料サイクルについても勉強されている熱心な方が多く、その方々からは、(1)原子力発電所から取り出した燃料を再処理工場へ運ぶ際に危険はないのか、(2)容器から多少なりとも放射線が漏れる恐れはないのか、(3)低レベル放射性廃棄物はどこに運ばれ、どのように処分されているのか—など、日頃誰に聞けばいいのかわからなかった疑問を、意欲的に質問されていた。

WIN-Japan会員からの熱心な説明により、「原子力のことが少し好きになった」「身の回りのものに例えて説明してもらってよく理解できた」「情報を鵜呑みにするのではなく、正しい情報を取捨選択することが重要である」など多数のご意見をいただき、日本各地から集まった会員も参加者の熱意にお応えすべく大いに燃えた。

さらに、「最終処分場の話は子孫まで続く問題であるので、みんなが納得できる解決策を見つけてほしい」「石油・石炭はリサイクルできないが、ウランはリサイクルできるので、エネルギー確保のために原子燃料サイクルを確立してほしい」と私たちを応援する意見もあった。

お帰り際には、「最初は知らない人ばかりのテーブルだったので心配したが、かえって、周りを気にすることなく自分の意見を言うことができ良かった」

「原子力は生活に遠い存在だと思っていたが、電気があるから、電化製品を使って家事をし、仕事や自由な活動ができるのである。原子力は遠い存在ではなく、生活に密着したものであることに気づいた」などのコメントをいただいた。



テーブルトークでは見知らぬ同士が着席

### アンケートの分析結果

次にアンケート結果を紹介する。今回の交流会の参加者は50～60代の女性を中心であった(図1)。「原子力発電が必要」「やや必要」と答えた比率は91%、原子力発電を「積極的に推進すべき」と「慎重に推進すべき」の合計は82%、と原子力に対する意識が高かった。また、原子力発電に伴い放射性廃棄物が発生することを知っているかと答えた参加者も68%と比較的高かった(日本原子力産業協会が実施した「エネルギーに関する意識調査(2008)」で、全国の原発立地地域における「原子力発電は必要」と答えた比率は62%)。居住地の近くに原子力発電があることに関しては、「立地地域の特徴を活かしていくべき」という回答が一番多かった(図2)。原子力発電に対する不安はあるものの、その環境を享受して、積極的に活用していこうという姿勢が見られた。

原子力発電に対する理解向上のために、誰がどのような内容を説明すべきかとの質問に対しては、原子力発電の専門家や電力会社が、原子力発電のメリット、デメリットや安全性について、きちんと説明すべきという回答が多かった(図3、図4)。これらの結果からは、地元の九州電力に対する期待が感じられた。一方、

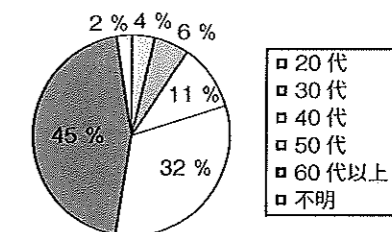


図1 参加者の年代構成

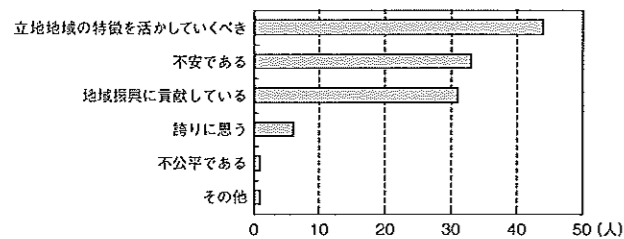


図2 原子力発電についてどのように思うか

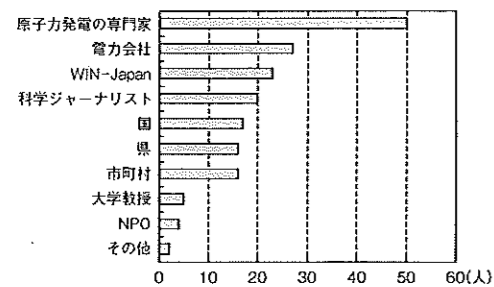


図3 原子力発電の理解のために誰に説明してほしいか

一般国民が心がけるべきこととして、「自分自身の問題として考える習慣」や「理解しようという姿勢」をあげた人が多く(図5)、自由記入欄においても、受身ではなく自分から積極的に勉強していくべきという意見が多かった。

テーブルトークの話題分析を行ったが、原子力発電の安全性に関しては、事故、地震、テロ、人為的ミス、放射能汚染など多岐にわたる項目が議論されていた。防災訓練のあり方を問い直すような声もあり、安全性を追求していこうという強い姿勢が見られた。

また、原子燃料サイクルや廃棄物処分に関連する項目も話題になっており、原子力発電だけにとどまらず、エネルギーや原子力全般に幅広く関心を持っている参加者が多かった。

薩摩の女性は「薩摩おごじよ」と呼ばれ、凛とした強さと華やかさを備えていると言われている。アンケート分析から見ると、今回の参加者は、安全性に対する探求心など、こうしたスピリッツを受け継いでいるように思われた。

### Face to Faceのコミュニケーション

WIN-Japanは2000年の設立以来、原子力平和利用推進の立場から、女性と次世代層を主な対象とし

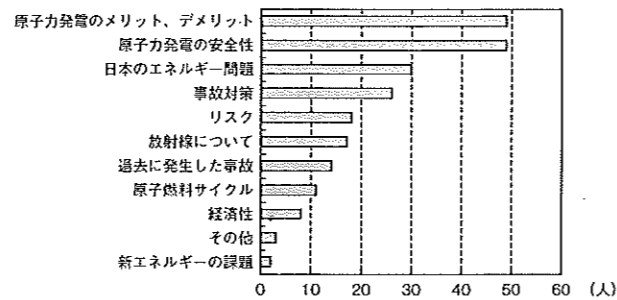


図4 原子力発電の理解のためにどのような説明が必要か

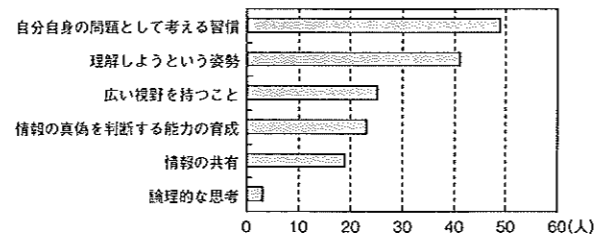


図5 原子力発電の理解のために一般国民が心がけるべきこと

て、原子力の理解促進を目的に活動している。原子力発電や放射線利用に関する正しい情報発信は、ホームページやパンフレットでも行うことはできる。にもかかわらず、わざわざ顔を突き合わせて交流会を実施する理由は何か。それは、Face to Faceの双方向コミュニケーションによる信頼関係の樹立である。一方的に情報を出すだけではなく、一人ひとりに合わせた内容で、相手の気持ちを汲み取りながら話をしていく丁寧な活動が、参加者から好評を得ている。会場の雰囲気や昼食の内容をはじめ、お花やお菓子など細部にわたるまで女性ならではの気遣いも好評をいただく理由の一つかもしれない。「正直言って、原子力のことが理解できたわけではないけれど、あなた達のような頑張っている人達が言うことだから、私はあなた達を信じる!」と熱い言葉と眼差しをいただくと、俄然やる気が出ると同時に、緊張で背筋が伸びる思いがする。さらに勉強して、もっとわかりやすくお話できるように事前準備に励まねばならない!と自分達の責任の重さも再確認した。

原子力に対する理解増進活動は地道にコツコツと続けることが重要である。WIN-JapanはこれからもFace to Faceのコミュニケーションを図っていきたいと考えている。みなさまからのご支援、ご協力をお願いしたい。

## 川内からの報告—72カ所で地区説明会を独自開催

九州電力 前田 由紀子

九州電力は、原子炉6基を佐賀県玄海町と鹿児島県薩摩川内市の原子力発電所で運営している。

本年1月8日、当社は、鹿児島県知事・薩摩川内市長に対し、川内原子力発電所3号機増設計画に係る環境調査結果を報告するとともに、増設の申入れを行った。改良型PWR、電気出力159万kWで、平成31年度営業運転開始の予定である。

### ■ きめ細やかな理解活動

環境影響評価準備書の届出に伴い、1月23日薩摩川内市で、1月30日には、いちき串木野市で環境影響評価法に基づく説明会を実施した。さらに、当社は、3号機の増設を進めていくうえで、地域のみなさまのご理解をいただくことが何よりも重要であると考え、法律に基づく説明会とは別に当社独自の取り組みとして、地区説明会を実施することとした。

これは、薩摩川内市と隣接2市をほぼ小学校単位の72地区に分け、当社社員が各地へ出向いて説明を行うものである。法律に基づく説明会に参加していただかなかった方々にも多く参加していただき、その地区特有の意見や質問などに直接お答えすることにより、地域に密着したきめ細やかな理解活動を行うことが主な目的であった。

72地区の代表者のところに、開催日時や場所の調整などで何度も足を運んだ。このような地区説明会を行うのは全社員が初体験である。説明内容はもとより、質疑応答への対応、会場セッティングの細部に至るまで検討を重ねて臨んだ。当初は、「説明が難しい」「わかりづらい」といった厳しい意見もあり、説明方法を見直す試行錯誤の日々が続いた。

2月に、ストーブを用意して始めた説明会は、鹿児島の厳しい残暑も和らいだ9月12日に全地区で終了した。参加者は、延べ1,668名にのぼった。くしくもこの日はWIN-Japan女性交流会の開催日であった。

### ■ フォローアップ

当社では現在、この説明会の実績を最大限に活かした理解活動をしている。例えば、毎月、広報誌を発行

(約5万部)し新聞に折り込んでいる。これは、説明会での質問の中から、数問ずつ選び、わかりやすい解説を掲載し、説明会に参加していただかなかった方へもお知らせできるようにしている。また、裏面には各地区の伝統行事や祭りなどを紹介し、親しみやすい紙面づくりに努めている。

さらに、説明会での質問などをQA方式に取りまとめ、72地区を再訪問しながら、フォローアップする予定である。他にも、説明会の開催で培った地区との関係を活かして、原子力発電所見学会の開催や各地区のイベントへ積極的に参加するなど、地域に根ざしたさまざまな理解活動を展開中である。

### ■ Change・Chance・Challenge

9月には民主党政権が誕生した。温室効果ガス削減目標は、前政権の「2005年比15%削減」から、「1990年比25%削減」に変わった。この25%削減では、相当な努力を要するが、同時に、CO<sub>2</sub>排出抑制のためには、原子力発電へ大きな期待が寄せられることとなった。事実、9月28日、川内原子力発電所3号機増設に係る環境影響評価準備書に対し、「可能な限り温室効果ガス排出抑制を図ることが重要で本事業により整備される原子力発電所の最大限の活用を図ること」と明記された環境大臣意見書が経済大臣へ提出され、10月2日には、環境大臣意見を勘案した経済産業大臣の勧告がなされた。原子力の活用をここまで明言されたことは過去に例がなく、発電時にCO<sub>2</sub>を排出しない原子力発電をPRする大きなチャンスが到来していると言える。勧告では、その他に自然環境について4点言及されており、当社は、勧告を踏まえ、鹿児島県知事からのご意見などにも配慮して、評価書へ適切に反映させるよう努めていく。

今後とも、ひとりでも多くの方に安心していただけるよう、きめ細やかな理解活動の継続が必要である。「エネルギーは一日にしてならず」である。世界のCO<sub>2</sub>排出抑制に貢献するため、当社も挑戦を続けていきたい。